

12-6 「賃金と物価」について

「人々は、「労働者たちの手にある貨幣手段の量が」「大きくなる」と「その結果、労働者の側からの商品需要が大きくなる。さらに、その結果は諸商品の価格の上昇である。」と。あるいは、「もし労賃が上がれば、資本家たちは自分たちの商品の価格を高くする。——どちらの場合にも、労賃の一般的な上昇は商品価格の上昇の原因になる。」と、言う。

「第一の言い方にたいする答え。」「必要生活手段にたいする需要の増大は、必ず一時は必要生活手段の価格を高くするであろう。その結果として、社会的資本のより大きい部分が必要生活手段の生産に使用され、より小さい部分が奢侈品の生産に使用される。」また、「労働者自身が奢侈品を買うかぎりでは、…ただ奢侈品の買い手を入れ替えるだけである。」
「いくらかの動揺の後には、以前と同じ価値の商品量が流通する。」

「第二の言い方にたいする答え。もし資本家的生産者が自分たちの商品の価格を任意に高くすることができるのであれば、彼らは労賃が上がらなくてもそれができるであろうし、またそれをするであろう。」

これらの「異論の全体が、資本家とその経済学者的追従者とのこけおどしなのである。」
「このこけおどしに口実を与える事実には三つの種類がある。」①労働者たちの手にある貨幣手段の量が大きくなるから物価が上がるのではない。「労賃の上昇は商品価格の上昇の結果であって、その原因ではないのである。」②「労賃が部分的または局部的に上がる場合」も多くの事情にによる。③「労賃が一般的に上がる場合には、生産される商品の価格は、」生産性が低ければ上がり、高ければ下がる。*下がるかどうかは不明——青山
(大月版『資本論』③P415B8-418F2)